

24) 小児肝限局性結節性過形成 (FNH) の 1 例

内藤 真一・岩淵 眞
大沢 義弘・内山 昌則
松田由紀夫・大谷 哲士
金田 聡 (新潟大学小児外科)

小児の肝限局性結節性過形成 (FNH) は稀な疾患で、本邦での報告も少ない。われわれは、8歳女児で、2年間肝腫大のため経過観察された後に、腹部超音波検査・CT 検査にて肝腫瘍が発見され、自覚症状は全く見られないものの、血管造影・肝シンチグラフィも含めての画像診断で、肝細胞癌との鑑別が困難であり、手術的に切除を行った本腫瘍の 1 例を経験したので報告する。

25) 腸重積症92例の検討

—14例の手術症例を中心に—

新田 幸尋 (新潟市民病院) 小児外科
小田 良彦・佐藤 雅久 (同 小児科)
内藤 真一 (新潟大学小児外科)

過去5年間に当院小児科及び小児外科にて経験した腸重積症は92例 (男71, 女21) 年齢分布は生後3ヶ月から8才までで、1才以下が53例 (58%) であった。

診断は、腹痛・嘔吐・血便にて疑い、89例を注腸透視にて確認し、4例は超音波検査にて診断した。

治療は、89例にバリウム注腸整復 (高さ 80~120 cm, バリウム 2~4 倍希釈, 空気整復 2例) を試み、74例を整復した。整復不能であった11例と再発例の 1 例、及び腸閉塞の診断にて 2 例、計14例に対し手術を施行した。

手術術式の内訳は、Hutchinson 法 (+虫垂切除) : 8 例, 回腸部分切除 (+虫垂切除) : 4 例, 回盲部切除 : 1 例, 虫垂切除 : 1 例であった。病因と思われる器質的病変を認めた症例は、メッケル憩室 : 1 例, 回腸重複症 : 1 例, 回腸粘膜下腫瘍 (胃・脾組織迷入) : 1 例, lymphoid hyperplasia : 1 例 (3 回再発例) の 4 例で、大部分が特発性であった。

26) 非機能性膵島細胞腫瘍の 1 切除例

川口 英弘・佐藤 好信 (巻町国民健康保険) 病院外科
齋藤 貞一・登坂 尚志 (同 内科)
高山 昌史 (同 第二病理)
西巻 正・大谷 哲也 (新潟大学第一外科)
梅津 哉 (同 第一病理)
味岡 洋一 (同 第一病理)

【症例】80歳男性 【現病歴】平成4年3月18日心窩部

痛が出現したため近医受診し当院内科紹介され入院。4月3日に施行した CT にて胃上後方の膵尾部近傍に 8×6 cm の低吸収領域を認め腫瘍が疑われ、腹腔動脈撮影を勧めるが拒否したため一時退院。6月2日左側腹部に重苦しい感じ出現し当院内科受診。ERP 腹腔動脈撮影にて膵癌の診断で7月1日手術施行。腫瘍は膵体尾部に限局し、周囲組織への浸潤は認めず、膵体尾部切除術にて切除可能。手術所見では Pbt, T4, HO, PO, S1, Rp1, CHO, DUO, VO, AO, N(-) にて Stage IV と診断。切除標本は 12×8×8 cm で重量は 375 g。切除標本の病理診断は悪性膵島細胞腫瘍で medullary type, INFα, ly1, v1, d(+), 被膜浸潤 (+) であるが被膜外への浸潤は認めず断端陰性。23種の抗体を用いた免疫組織化学的検索では GIP と secretin のみ陽性。以上より非機能性膵島細胞腫瘍と診断。術後経過良好にて8月12日退院。非機能性膵島細胞腫は稀な疾患であるが文献的考察を加え報告する。

27) Solid and cystic tumor of the pancreas の 1 手術例

武者 信行・薛 康弘
平塚 雅英・草間 昭夫 (水戸済生会) 総合病院外科
中山 宗春・斎藤 宏 (同 病理科)
小島 瑞 (福島労災病院) 病理科
箱崎 半道

solid and cystic tumor (SCT) of the pancreas は、病理組織学的に特徴ある所見を呈し、一般的に良性の経過を示す膵腫瘍である。

今回、術前診断が困難であった12歳女児の症例を経験したので、ここに報告する。

本年6月、上腹部に可動性良好な超鶏卵大腫瘍を自覚し来院。腹部超音波、CT 検査で、胃小網内に径 6.0×5.4×4.6 cm の被膜を有し、内部不均一な solid mass を認めたため、間膜由来の腫瘍を疑い7月27日開腹術施行。膵体部前面に広基性に突出する嚢胞状の腫瘍を確認、迅速細胞診で悪性所見は認めぬものの、充実性の腫瘍であるため膵体尾部切除施行した。術後永久標本で SCT の診断を受けた。

SCT は、1981年 Klöppel らにより報告されて以来、本邦に於いても約50例の報告がなされているが、当院に於いても過去経験がなく、比較的希な疾患でもあるため今回報告する。